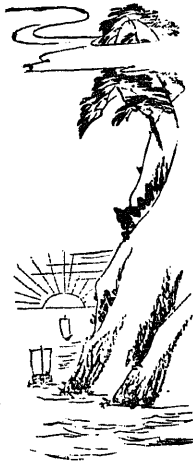


海苔を焼き一枚を四つ位に切り、漬け置きたるう
どを取り出し、切りたる海苔の上のせて巻く、
それを更に切らざる海苔にて、七つ位一所にして
巻き、一寸位に切りて、皿に盛る、

わちやら酢の拵へ方は、みりん五勺を煮切り、
次に砂糖二十勺を水三勺鍋に入れ、火にかけて
煮とかし、前の煮切に交ぜ其中に酢三勺ほど加
へとうがらし、二三本を小口切にして入れるな
り



家庭小説

琵琶の秘曲

堀内新泉

一、
常陸國の山奥に、茂作といふ、木訥な炭焼が住
んで居つた。

茂作には、兄弟の、立派なる息がおり、兄の名
は茂吉、弟の名は茂助。

兄は目下兵役に服して居るので、今年十六の弟
は、専ら父を助けて山住居をし、里遠き山中の炭
焼小舎に起臥して、毎日炭を焼いて居つた。

頃しも秋の末方に、老爺の茂作は、一日足を痛
めたので、止むを得ず、暫く山を下ることに成つ
た。

「何らも、飛んだ事をした！これぢやア仕事が出
來ぬから、里に下つて、足の痛みを治して來なけ
た。」

ればならぬ。一人ぢやア淋しからう、サア、茂助
お前も一緒に來いや、

「イヤ、お父さん、私は歸られん！兄さんは居ら
ず、三人とも仕事を廢つては、早速食べるに困
ぢやア無いか。私は父兄に代つてこの山に残り、
骨折つて炭を焼かう」

「でも、お前を一人、この山中に残して行つては、
乃公は、何うも安心が出來ぬ！」

「ナニ、案じなざるな！私は無事で稼いで居るか
ら、お父さんは、早く、里に下つて、一日も早く、
足の痛みを治して下さい！」

二、

茂助は確りした少年であつた。安心させて老爺
を返し、自分は一人山中に止まつて、毎日愉快に
稼いで居つた。

その後、程なく霜が下りると、山は俄に五色に
成つて、何んとも云へぬ好い景色！

特に茂助が住んで居る小舎の近所は、まるで錦

の幕でも張つたように成つた。

毎年見馴れた茂助の眼にも、その儘見ては居ら
れぬと見えて、炭を焼きながらポキ〜と、朝露
に紅の滴るような紅葉の枝を折り取つて、萱で葺
いた小舎に挿したり、又は、炭釜の近所に挿した
りして、若き山人の心は愉快に満ちた。

三、

程なく月の夜が來た。

一夜茂助は炭釜の蓋をして、サア最う寝ようか
と思つたが、餘りに月が明かなので、釜の前に立
つて、里人は想像の及ばぬ、秋の山中の、月夜の
景色に見惚れて居ると、忽ち聞く、何處とも無し
に、何んとも云へぬ面白い琵琶の音！

茂助は驚き、始めは、我が耳を疑つたが、或は
遠く、或は近く、或は溪聲の木枯に咽ぶが如く、
或は春水の寛々として行くが如く、忽ち急に、ま
た緩く、音色床しく聞えるのは確に琵琶の音であ
つた。

四、

その翌夜は、更に、美しい月夜であつた。例の通り、茂助は炭を焼いて了ひ、今夜は最う、昨夜のやうな面白くはないかと思ひ、何んとも云へぬ静寂高潔な、山中の夜景に凝然と見惚れて居ると、今夜は、後の山の八合目邊に方つて、時違へず、琵琶の音が聞え、聞けば、聞く程、面白さが加つはて、茂助は我れ知らず、獨り手に踊り出した。

何人のすさびとも知れず、今夜もやゝ暫く、琵琶の音は、明月の下に聞えて居つたが、次第次第に絶えて終つた。

五、

その翌日から、茂助は大人の二人前も、仕事か出来るやうに成つた。何故だと言ふと、彼は何んなに働いても、今夜また彼の面白い音を聞くのだ！といふ樂みか、茂助の心を勇ませるので、彼は何んなに働いても、少しも疲れを感じぬので

あつた。

人は勇氣が無くてはいかん。まだ一少年ながらも、茂助は、我れ一人その山中に止まつて、父の業を助けようと云ふ勇氣を有つて居つた。

人は同時に、愉快の身に離れては成らぬ。父は療治に下つた後でも、茂助は少しも淋しがらず、我れ一人止まつて居るその山中に、何か面白い事はありはすまいか、イヤ必度あるに違ひないと確信し、早くその面白い事に出會ふのを待つて居た。茂助にして、若し、斯う云ふ愉快な精神を有つて居らずに、怖れを抱いて我れ一人、この山中に残つて居たら、何んな怖ろしい怪物が出て來たかも知れぬのだ、心の迷ひといふ奴は、いろ／＼な怪物に形を變へて、人を苦めるものだといふ事は、常に記憶し、かかねば成らぬ。

六、

「サア、今夜も亦面白いぞ！」と確信して、茂助は終日働いて、こゝにその日の仕事を終り、炭釜

の前に焼火をして居ると、今夜はスグ溪川の向ふの岩の上、其處には技振の好い、紅葉の紅く照つて居る處で、ソレ聞え出したと思ふと、歌の聲まで好く聲える。

「さて、淺間しの人の世や」

ピン〜！

「さて、淺間しの人ごゝろ」

ピン〜ピン！

「我れをのろひてつ島に」

ピン〜ピンピン〜……………」

茂助は、凝然と聞き惚れた。

琵琶は忽ち急調に、

ピン、ピン、ピン、ピン、ピイン、ピイン

……………」

茂助 愉快に絶えかねて、今夜も立つて踊り出した。

七、

翌日も亦切切と働いて居ると、母親が案じて、

山深う登つて来た。

彼の女は我が息子の無事な顔を見るまでは、いろ〜胸を痛めて居つたが、いよ〜小舎の側に來て、一生懸命に、炭を焼いて居るのを見て安心し、第二にはその邊に、澤山炭の焼けて居るのを見て、雷ならず喜んだ。

「オ、茂助、お前は無事で働いて居たか、嘸、まわ、淋しい事であらう！」

「ア、おツ母さん、善く來て下さつた！私はこの通り、毎日愉快に働いて居るが、お父さんの、足の痛みは何うでしょう？」

「イヤ、大きに快いが、たゞ、お前の事はかり心配して！」

「私はこの通り達者で、木を伐るにも、炭を焼くにも、毎日愉快に暮して居るから、何うか心配せぬように、ゆツくり療治をなさるよう、茂助が云つたと傳へて下さい！」

「まわ、何んなにか喜ぶだらう！」

「私も便を聞いて安心！」

「ア、私もこれで落着いた！まあ、その邊の紅葉の見事さ！だが、夜は定めて淋しからうね！」
 慰めながら、母は風呂敷包を解いて、いろいろな食物を取り出した。

八、

安心させて母を返し、茂助は再び仕事に着手つて、夜を楽しみに、その日を暮した。

世界最大の大慈善家

メキシコの鑛業家ベドロアルバアラドと云ふ人は先頃二千万圓と云ふ大金を同國の貧民に給與するに決して此事を同國の政府に申出たそをで同國の大統領は五名の委員に命じて其分配方法を講せしめつゝありと云ふことです。

此アハバアラドと云ふ人は同國中では非常な資産家で其財産は殆んど計算することが出来ない程で嘗つては同國の國債全部を一人で辨償し様と願ひ出て政府が許さなかつた位だそうです。

そして氏が一生の願と云ふのは何うかして世界第一の慈善家になりたいと云ふのだそをで米國のカリーネギーなどは遠く押し退けてしまつて世界の無比の大々慈善家になつて力の限り其無盡藏の富を慈善の爲めに遣ふと云ふのだそをです。何と豪い人があつたものではありませんか。是でこそ始めて富の價値が表はれると云ふものです。

今夜も早、炭を焼いて了つたので、少年は焼火の前に寛いで、モウそろ／＼始まる時刻だなど待つて居ると、今夜は直様我が前で、琵琶の聲が起つたと思ふと、美しい長い美事な鬚を有つ、温かな白衣の老人が、焼火に近く座を占めて、これ聞けがしに撥を執り、琵琶の秘曲を奏てるのであつた。

(とはち)